



真宗大谷派
(東本願寺)

桑名別院 本統寺

第45号

発行所:桑名別院

発行人:長澤隆司

ぶ坊さんだより

2025年
9月

福島プロジェクト

さる8月16日〜21日まで「福島のこともたちに三重へプロジェクト」が開講されました。福島第一原発の事故後、福島県のこともたちに限られた期間だけでも思いっきり遊んで、笑って、食べて、親子ともに三重県で過ごしてほしいという願いのもとで始まった当プロジェクトも開始から14年が経ち、いまや家族のような関係性の中で、親交を深め続けています。桑名別院におきましては、期間中の宿泊や桑名別院婦人会が主催となつての夕飯(今年は8月18日)作り、食事など、互いに貴重な体験をいただいています。ご尽力賜りました婦人会の皆さま(16名)、また食材などをご寄付いただきました皆さまには厚く御礼申し上げます。



以下【第59回 暁天講座(2025年7月17日〜21日)聴聞より(編集担当の受け取り)】



石川県 珠洲市 乗光寺 坊守
ルボルター・ジュライター
落合 誓子氏

令和6年能登半島地震によって、本当に寺っていうのは何なんだろう。どういふところなんだろうという問題が浮き彫りになりました。

例えば、珠洲市に住所をおきながら、子どもや知り合いのところに身を寄せていたり、連絡がつかなくなる門徒さんが沢山いらっしゃいました。

門徒さんからの連絡も少なく、関連死を含め、地震でかなりの方が亡くなられましたが、寺に報告に来られた方はほぼ皆無

で、お葬式も、昨年前半は全くなかった。亡くなったことを寺に届けること自体も次の世代には継承されていなかったのです。今までおじいちゃんおばあちゃんが行ってきたことは、次の世代には届いていなかった。今思えば、お寺参りも、本堂に入

って本尊に向かって手を合わせず、一度も本堂に上がらずに帰る方が増えていました。こうして緩やかに門徒が減っていく

厳しい現状があったことを今、大きな地震によって噛み締める。しかし、その中でも引き継いでいたこともあって、それは同志

で共に立ち上がる力です。

地震が起こる前のことですが、60力寺のお寺が集まり、最大勢力となつて珠洲

原発を断固反対したことがありました。寺は昔、人口を管理する役人でしたので、ご門徒の中には、いまだにお寺に全部さらけ出すのはこわい思いがあったり、行政の味方という認識も強かったようです。

その壁も原発反対運動によって半分切れ、地震でもう半分切れ、ようやくご門徒と平座になった。

地震の後、みんなが「珠洲に原発がなくたってよかったね」と言いましたが、原発を反対し続けてきた根っこにあるのは、ご信心だったんじゃないかと思っています。

命を粗末にしながらか成り立つ、国の形さえ変わってしまうようなもの(原発)に手を出すべきではないというのが、仏教徒の共通認識だったからだと思

います。それはご先祖から本堂の意味でつながってきたお念仏の力がずっと消えずに残っていて花開いた瞬間でもありました。

そのことを踏まえながら、これからの在り方を考えていましたら、地震で潰れた街の中で、若い人が泣きながら言っていた。「さあ、誓子さん、これからや」と。暖かく、そして明るいのです。

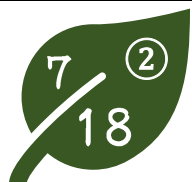
ご門徒でなくても、絶望のどん底の中でそういうことが言い合える環境。あんな目に遭つても立ち上がってこられる力。

それも、原発反対運動の時のような、親鸞聖人から延々と続き、私たちまで届けてくださった量り知れないお念仏の力ではないか。それが大切なものなのではないかなと、今思つのです。

地震でほとんど総てを失って、

さあこれからです!!





安藤 弥氏

徳川家康にまつわる記録には、様々な仏教各宗派の僧侶に意見を求めていた様子が多く残っています。徳川家康は、戦乱を収め、徳川の平和を実現したものの、それは差別も争いも残る中で多くの人を殺し、滅ぼしたことで成し遂げたことであることに、その罪に晩年は怯えて過こし、宗教的な罪業を抱えた私が、それでも成仏できるのか、生きていていいのかと救いを求めています。

三帰依文の願い

人の身を受けて生まれてきたことが、本当に自分の人生になっているのだろうか。そのこと自体私たちは受け難いことである。しかしながら、今すでに仏縁にあわせていただいている。そのことを大切にしたい。救われていけないなら、限りある人生において、それはいつ明らかになるのか。一緒に「三宝に帰依してまいりましょう」ということを「三帰依文」では呼びかけています。「三宝に帰依する」とは仏・法・僧を「心から安心できる場所」、「生きる依りどころ」として、そこに帰っていくことです。

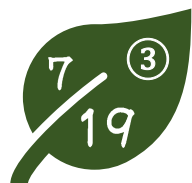
はじめに「仏」とは、決して誰かや、この人がではなく、真理に目覚めたもの、本当の事に気づいたものことです。つづいて、「法」とは「ダルマ」とも言

い、どれだけ押しても倒れないための教えではなく、「だるま」のように倒れても起き上がるができる、そのような教えです。最後に「僧」とは、共に教えを聞く私たちのことです。

「三帰依文」とは、私たち一人一人が、人間として本当に仏の教えに出会い、仏になっていくことが願われている文です。私たちは仏から「本願を信じて、念仏を申して仏となる道を歩んでいくようになること」を願われているのです。それが阿弥陀仏から私に對しての本当の願い（本願）であります。本願は根源から、本来から私たちに宿っている願いでもあります。だからこそ、その私の中に願われている「仏・法・僧」の三宝を大切に見つけてください。そのことに帰依していきましようということ、お釈迦さまは「自らに帰依せよ、法に帰依せよ」とも言われます。



仏教の歴史を研究するうえで一番大事なことは、お念仏の歴史は過ぎ去った過去ではないということ。そこには過ぎ去らず、積み重なって、今この場所があるということ、ずっと呼びかけられている願いがあるということ、皆さんは今までに称えたお念仏の回数、正信偈をお勤めした回数を覚えていますか。すなわち、もはや数ではなく、それは人生の一部、あるいは全部、私の中の願いとなっているのです。



稲岡 智子氏

すべてのものが、すべてのもののお陰で、今こうして成り立っているということに、普段は中々頭が働かない。「感謝ばかりしているだけでは、生活が回らない」と気づいたら、つい怒ってばかりです。

ソウを知らない人が目を隠して集まり、ソウの一部分だけを別々に触ると、ソウがどんな生き物なのかで互いに言い争いが起きるように、私の考える理屈はいかに片面的な見方のみであてにならないかという問題に気がつかないのです。

ですが、お念仏させていただいて、「こうやって私は育てられているんだ。皆さんに育てられて、ここにいるんだ。生かさせてもらっている」と、気がついた時に、念仏を通して本当に感動をいただくということがあります。

そして、そこで私は阿弥陀さんにお会いすることができ。感動して念仏をいただくことで、今までで気がつかなかった、私を生かしてくださるすべてに目覚めることができるということ。阿弥陀さんが、心をどんどん育ててください。



日常に様々なご恩がある中で、そのご恩に気がつかない私。生かしてもらっているということに目覚めず、便利なものに頼ってしまっ、楽をするばかりになる。そんな自分の罪深さに気づけた時、地に足つけて、丁寧に生きていくことができ、それが自分を本当に大切にすることなのだろうと思います。

育児をしながら、 お育ていただく

「生かしてもらってありがたい」という気持ちに満ち溢れていても、次の瞬間には怒りの心が簡単にそれを焼き尽くしてしまうこともあります。良いことも悪いことも、必ず変わっていく。お釈迦様は諸行無常を説かれたはずなのに、自分にとって調子の良い時が続くと思ひ込んだり、変わって欲しくないとしがみついたり、諦められない。なかなか教えるも聞けなくなってしまう。

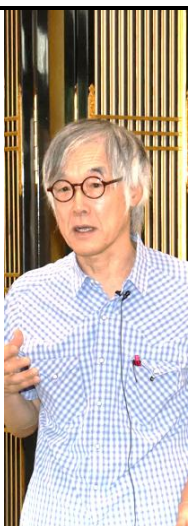
自分の心一つ、思い通りにならない。あてにならない。じゃあ、あてになるのは何かって言うと、やっぱりお釈迦様の教えです。念仏してくれっていう、阿弥陀さんの願いですよ。

自分を生かしている命に南無する。それは、自分の命に出遇うてことだと思つのです。自分の命を生かす、命に出遇う。「南無阿弥陀仏」すればするほど、自分の心を育ててくださる。皆さんも念仏して、ご自身の命を生かしてくださる命に、どうぞ出遇って、感動して生きていただきたいと思います。

小説家／文芸評論家
明治学院大学名誉教授

高橋源一郎氏

先日、甫木元空さんという若手の方と、その方の映画「BACUS」映画から船出した映画館」の上映イベントにてお話ししました。彼は優秀だし、性格までいい。彼は、父や母、師匠とする人を割と早くに亡くしていて、でも彼のお父さんがホームビデオをよく撮っていた。空さんを写した映像が百時間以上ある。もちろん撮ってるお父さんは映ってない。でも生きてこんな楽しいような笑顔を向けるかねってというのが映ってる。撮る人、写る人、互いにめっちゃくちゃ愛情が溢れている、そこに撮った人の気持ちや視線がある。彼がそんなにいい人で愛情深くて才能あるのは、ご両親の教育じゃなくて愛情だと思いました。



その話に似た話で、大作家の幸田露伴の娘で、作家の幸田文さんは離婚を経験して父親のところに戻ってきた。お母さんは亡くなっていたので、露伴が16歳の娘に家事一切を教えるわけです。彼女は本を読まない人でした。露伴も文学を教えなかった。ところが彼女はデビュー当時からめっちゃく文章がうまい。それは、露伴から教わった一つ一つの生き方全てが「文章教室」になっちゃって

る。つまり、全部父親の光の中です。死んだ後もずっと、後ろから支えている。この一種の教育というか、親と子の関係性が、宗教における師と弟子の関係性にも通ずるんじゃないかと思うんです。

僕は『歎異抄』が大好きで、親鸞の言葉が書かれているけど、弟子の唯円が書いた本という視点が結構大事だと思ってます。親鸞のやつばりすごいところは、第2章のところですが「念仏で浄土に行きますよ」とは答えません。つまり、親鸞は本音として「師を信じて実行しているだけ。念仏して地獄に落ちてしまっても分らない」として、自分が何かを信じているところを見せるしかないとしている。本音しか人は信用しないんです。だから、生き方を見せてる。信仰の仕方を見せてる。難しいことをやってもらうためには、自分も難しいことをやってみせるしかない。僕、『歎異抄』の本質はここにあって思いますが、それは唯円が親鸞を信じたって話。なぜなら親鸞が法然を信じたから。あとは僕らがこれを信じられるかどうかですね。

「あの世」と「この世」

親鸞が「法然を信用してます」っていう場所は、もはや「この世」でも「あの世」でもない場所。中間の非常によくわからないう空間だからこそ起こる奇跡みたいな。これは難しいことではなくて、親子の間でも、愛情を与えさせてもらってればいいんです。つまりは慈悲。「宗教を信じる」っていうのは何も特別なことではなくて、僕らはすでに知っているんです。忘れていただけで。だから時々思い出ししましょう。

三重県四日市市安正寺住職
大谷大学非常勤講師

山田恵文氏

親鸞聖人がお開きになった浄土真宗という仏教は、私たちに「人生の依りどころ、本当に大事なことを教えてくれている。そのことを自分自身のこととして、心からありがたいと思えてこそ、初めてお誕生をお祝いできるということがあります。

「願い」は目には見えないけれど、確かにあります。「願い」を持っている人の行動や、言葉のように「形」になったものを通して、出遇うことができる。阿彌陀仏の「みんなを平等に救いたい、安らかさを与えたい」という「願い」も、「南無阿彌陀仏」という念仏を通して出遇うことができる。これが「願い」と「形」の関係です。



親鸞聖人は、自分が法然上人のもとで念仏の教えを学び、救われた。今度は人々に伝えていこうとする。その姿に「教化の願い」があります。親鸞聖人は39歳の時、流罪を赦されたのに、京都へ帰りませんでした。それは40歳の時に、師の法然上人が亡くなり、「私が亡き後は一箇所に留まるな」という遺言（群れ集まれば困み合いや争いが生じるから、それぞれで念仏の教えを実践してほしいという願い）を受けての行動であり、みんなに念仏の心を伝えたいという「願い」をもって、沢山の書物を

残されました。その「形」を通して「形の無い願い」に私たちも出遇うことができます。

『歎異抄』には、念仏の教えに疑いや不安を持った関東の門弟たちが、念仏が救いになるのか確かめに来られた章があります。親鸞聖人は「私は、念仏をして阿彌陀仏にたすけられなさいと、法然上人が教えてくださった。それを信じる以外ありません。」と答えます。「念仏でいいんですよ」と、はっきり言えたはずなのに、そういう言い方をしない。釈尊がお経を通して阿彌陀仏の「願い」を伝え、善導の解釈に出遇って念仏されるようになった法然上人より伝わった「教え」に救われた親鸞聖人は、その「法のつながり」をあらわすことで、決して法然上人を頼っているのではなく、依りどころとしているのは「教え（法）」、本当に依りどころにすべきはなにかを覚えて語っておられる。

親鸞聖人は言葉に厳密でした。そこに親鸞聖人の「願い」が感じられるわけです。たとえば「憶念」について「本願をつねにおもひいづるころのたえぬをいふなり」とおさえますが、親鸞聖人は「つね」を漢字で書くとき「恒」とされます。この字は、「その都度、その都度」という意味での「つね」です。つい忘れてしまう私たちの現実（に寄り添う親鸞聖人らしい表現です。そのうえで、「ずっと」を意味する方の「常」という字は「阿彌陀仏の本願（救いのはたらき）」に使われます。

このたびの講題も、そのことを意識して私自身の思いを表現したものであります。

親鸞聖人の願いを憶う



9月の行事予定



法話(又は講演)のご案内

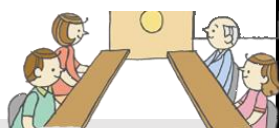


- ◇ 人生講座 会費 500 円
9月7日(日) 7:00 ~ 8:00
講師 石川 加代子 氏
(多度町 西方寺 坊守)

※毎月第1日曜日開講。

10月5日(日) 講師 西藤 孟志 氏(桑名市 慈航寺 住職)

- ◇ 同朋の会 【正信偈のことばにふれる⑩】
9月5日(金) 13:00~15:00 会費 500 円
講師 長澤 隆司
(桑名別院 輪番)



※ 毎月第一金曜日開講。

次回10月3日(金) 講師 長澤 隆司 (桑名別院 輪番)

- ◇ 桑名別院法話のつどい
9月13日(土) 13:00~15:00
講師 西寺 真也 氏
(伊勢市 本覺寺 住職)



- ◇ 親鸞聖人御命日のつどい
9月28日(日) 13:00~15:00
講師 訓覇 浩 氏
(菰野町 金藏寺 住職)



- ◇ 晨朝法話
毎朝 7:00 からの勤行後
法話 別院列座(13日、28日の御命日は輪番)



法要(お勤め)のご案内



- ◇ 晨朝(おあさじ) 毎日 7:00~

- ◇ 祥月経 毎日 9:00~

毎月13、28日は13:00~、31日は前日に兼ねます。

また、今月4、7、17、20、23、26、29日は前日に兼ねます。

他の時間に祥月経をご希望の方、
または年忌等、各種お参りをご希望の方は
寺務所までお問い合わせください。

- ◇ お夕事 毎日 16:00~

- ◇ 御命日のお参り

先門首 13日 / 親鸞聖人 28日

前 日: 13:00 より逮夜

御命日: 7:00 より晨朝、9:00 より日中

- ◇ 秋季彼岸会 9月20日~26日

20日 土

9:00~ 初日中法要
13:00~ 総経
引き続き 法話 (~15:00)

講師

高木 彩

氏 (四日市市 信光寺 住職)

21日 日

13:00~ 総経
引き続き 法話 (~15:00)

講師

岩田 理恵

氏 (松阪市 道専寺 坊守)

22日 月

13:00~ 総経

23日 火

秋分の日

9:00~ 中日中法要
13:00~ 総経
引き続き 法話 (~15:00)

講師

榎 歩

氏 (鈴鹿市 安養寺 住職)

24日 水
25日 木

13:00~ 総経

26日 金

9:00~ 結願日中法要
13:00~ 総経

その他(9月の予定)

- ◆ ———— どなたでもお気軽にご参加いただける別院行事です。
- ▶ ———— 別院各種会議(該当者にはすでにご案内をお送りしております)
- ★ ———— 教区・別院の慶讃法要に関連した事業・イベントのご案内です

- ◆ 仏具のお磨き
9月 4日(木) 9:00~11:00



- ◆ 清掃奉仕活動 主催:桑名別院婦人会
9月10日(水) 9:00~11:00

- ◆ 仏華講習会
9月17日(水) 10:00~16:00 頃



- ◆ 婦人会報恩講 主催:桑名別院婦人会
9月29日(月) 9:30~11:00

- ▶ 報恩講会議 (責任役員・桑名別院関係団体代表者)
9月 10日(水) 14:00~16:00頃まで 会場:別院庫裡

- ▶ 第60回暁天講座実行委員会(第1回)
9月 30日(火) 14:00~16:00頃まで 会場:別院庫裡

- ★ みんなで歌うワークショップ
9月13日(土) 15:00~18:00 会場:桑名別院
→「みんなで歌う慶讃法要(2026年3月1日クラギ文化ホールにて)」を
僧侶・門徒とともに歌う音楽法要にておつとめします。
現在、三重教区合唱団「ひかり」とともに音楽法要に参加いただける
方を募集しています。興味のございます方は、上記の日程が
音楽法要参加のための初回練習となります。 詳しくは →



@106ihhaj

真宗大谷派 (東本願寺)
桑名別院 本統寺

住所 ▶ 〒511-0073 三重県桑名市北寺町47番地
寺務所の開閉時間 ▶ 平日(土日祝以外) 9:00~17:00
TEL ▶ (0594)-22-0652 FAX ▶ (0594)-22-0681
メール ▶ kuwanabetsuin@gmail.com

